

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 藤村文学の金銭問題—岸本、三吉、半蔵の人物像からみる場合—

doi:10.29714/TKJJ.200712.0005

淡江日本論叢, (16), 2007

作者/Author： 林寄雯

頁數/Page： 57-69

出版日期/Publication Date：2007/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200712.0005>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



airiti

藤村文学の金銭問題 ——岸本、三吉、半蔵の人物像からみる場合——

林寄雯

要旨

島崎藤村の五つの長編小説を取り上げて論ずるとき、「自然描写、告白、懺悔、青春、恋の世界、個の自覚、新生、愛、旧家、悲劇」といった主題があげられる。藤村は一生涯を通じて近代精神を追及してやまなかった。

『破戒』、『春』、『家』、『新生』、『夜明け前』は近代を目覚めた人の悲しみを描いた一連の小説ともいえる。しかしながら、藤村文学を金銭という主題で取り上げて論ずるものはないといっているほどである。本論では『春』の主人公岸本、『家』の主人公三吉及び『夜明け前』の主人公半蔵の人物像を金銭の側面から分析し、自己の独立を求め、近代を乗り越えようとする人々にまつわる金銭によりもたらされた矛盾を解明する。

キーワード：金銭、近代、矛盾、人物像、自己の独立

airiti

藤村文学の金銭問題 ——岸本、三吉、半蔵の人物像からみる場合——

林寄雯

1 はじめに

島崎藤村の五つの長編小説を取り上げて論ずるとき、「自然描写、告白、懺悔、青春、恋の世界、個の自覚、新生、愛、旧家、悲劇」といった主題があげられる。『破戒』は一部落出身の青年瀬川丑松が自分の素性を告白することによって、自己の存在を目覚めた近代人の人間像を造形した画期的な作品である。『春』は『文学界』の青年たちをモデルにした作品である。青年たち青木、菅、市川、岸本、岡見の恋が描かれ、自己の恋愛を告白することによって、恋愛の自由を主張し、個我を自覚した人間像が浮彫りにされた。『家』では両大旧家小泉家と橋本家を通して旧い家の崩壊と新しい家の建設を描いた。社会の多くの側面に巻き込まれ、その中で悩む人間を描き出し、個人の独立と家の問題を苦悩してやまない人間の肉声が鮮明である作品である。『新生』は告白と愛の問題を追求した作品である。岸本と姪の節子との間の不倫の愛を告白するによって、近代日本が抱えた愛の問題を追求した小説である。藤村が最後に書き上げた長編小説『夜明け前』は日本の一大変換期である明治維新という時代を背景に、父島崎正樹をモデルに、主人公青山半蔵の悲劇の一生涯を綴った作品である。半蔵はまさに近代への潮流を乗り越えられなかった人の一典型である。

『破戒』、『春』、『家』、『新生』、『夜明け前』は近代を目覚めた人の悲しみを描いた一連の小説ともいえる。しかしながら、藤村文学を金銭という主題で取り上げて論ずるものはないといっているほどである。本論では『春』の主人公岸本、『家』の主人公三吉及び『夜明け前』の主人公半蔵の人物像を金銭の側面から分析し、自己の独立を求め、近代を乗り越えようとする人々にまつわる金銭によりもたらされた矛盾を解明する。

2 『春』の岸本

藤村の第二の長編小説『春』は、主人公岸本が関西漂泊の旅から戻って

きて友人との会合から始まる。その会合を実現するための現実的な側面を考えると、旅費の問題があげられる。

『春』の冒頭は、青木が岸本に旅費を送る手紙である。

『岸本君、七月二十二日に東海道の吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することとしよう。君の都合もあらうと思ふから為替で旅費を送る。』（『春』一）

この手紙は七月二十二日に東海道の吉原での会合を知らせることより、むしろ旅費を送る知らせとして読みとるべきである。実は岸本はその為替を待ちに待っていた。岸本の半年の流浪の旅は『春』第三回到こう書かれている。

彼が漂泊したところは東海道から西の方で、熱田から便船で四日市へ渡る、亀山といふところに一晚泊る、それから伊賀近江の國境を歩いたが、其間には種々な寂しい悲しい旅の思を経験した。黒ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の舊い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留して居たこともあつた。彼は又、伊豫行の汽船に乗った。それは舊友の足立を訪ねる為であつた。そればかりではない、彼は大和の方へも一月餘の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅つた。

琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の眼にあつた。彼が西京から湖水の畔へ引返して、それから斯の吉原へやつて來る迄、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りて居た。其頃は自炊だ。（『春』三）

岸本が自炊生活を引き上げるきっかけは、友人の青木が送ってきた冒頭のある一枚の為替であつた。二ヶ月半の茶丈生活はもう続けられない状態であつた。蚊に責められて自分で蚊帳を張って、裾に古銭を飯粒で貼り付けて、洪団扇で風を入れて寝た。それは何とか耐えられたようだったが、今度は亭主が留守の晩に、内儀が蚊帳の外で「岸本さん、岸本さん」と呼んでくる。そこで「急に可恐しくなつて、丁度友達から為替が來たのを幸、逃げるやうに」（『春』三）そこを發った。

表向きは「東西から富士のもと」に集まるという雄大な構想であつたかもしれないが、現実面の岸本は、漂泊の旅から逃げて帰って來たことであつた。岸本が憧れた古人の旅との間に破綻が見えてきた。『春』に岸本の旅費が工面しにくくなったことを次のように描いている。

『さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。』（『春』一）

『どうして彼の男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ。』と市川は友達が出奔の當時を想ひ浮べるやうな眼付をした。『麵麴は天にあり、てなことを言つて——』（『春』一）

『旅費まで送つて貰つて濟まなかつたね。』と岸本はかしこまつたやうに坐り直した。彼は難有いといふ面持で、可憐しい友達の前に手を突いた。（『春』三）

元箱根を發つ時、岸本の懷中には僅少しか金が残つて居なかつた。他の友達はそれぐ歸るべきところが有つて歸つて行のに、彼ばかりは何處へ歸るといふ目的も無い。もとより家を出て了つた彼である。今迄通り漂泊を續けるより外に、彼の取るべき道は見當らなかつた。何時が、そんなら、旅の終であるか——といふことは、彼自身にすら答へられなかつたのである。（『春』十）

斯寺の部屋代を拂ひ、門前の飯屋の勘定を差引けば、残る處は僅少しか無いといふ境涯にある。ウカウカして居ると、東京迄の汽車代にも差支る。（『春』十二）

岸本が東北行の旅費は傳馬町の方で出して呉れる、斯ういふことに成つたのも市川の盡力である。（『春』十八）

夫から、二人の親友は妙に笑へなくなつて了つた。

此の事情といひ、是迄さんぐ世話に成つた揚句といひ、岸本は岡見に向つて今更金の無心も出來かねるやうな仕末と成つた。姉さんか母親さんのやうに面倒を見て呉れた峰子—其人にも岸本は今永い別離を告げた。最早彼を助ける人が無かつた。（『春』三十）

このように岸本の旅費の無心が段々せまく成つていって、青木が『春』第一回で半年ぶりにあつた岸本に対し、「さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし」と言い出したところに、岸本が岡見の金銭面の依頼から抜け出せない状態を物語っている。

放浪から帰つてきた岸本にとって、旅費は避けられない問題として残された。その九月に青木の斡旋で八戸へ行く旅費も「傳馬町の方で出して呉れる」（『春』十八）はずであつた。また、仙台へ行く前に、岸本が家の苦境でお金に困っていた頃、ふと町で出会つた岡見にお金を無心した。次にその描写をあげる。

結局岸本の話は金に落ちて行つた。（中略）

『十圓位で間に合ふことなら、今こゝで御用立しませう。』

と氣前を見せて、無造作に紙入の中から取出して渡した。岡見は友達を助けるといふことに依つて、自分の性質を満足させた。いや、そればかりではない、彼は戀の成功者として高い税を拂はせられた形である。
(『春』百二十二)

『春』は、漂泊から友人に送ってもらった旅費で帰ってきたところではじまり、安定した収入が入る新しい出発に、仙台へ赴く汽車の中の岸本の姿で終わる。古人を憧れた旅、また青春を記した恋の背後に金銭面による矛盾が見られ、自己の確立に破綻が生じたのである。

3 『家』の三吉

『家』は、『春』の後半に描いた岸本捨吉が経験した家よりの艱難に引き続き、家の問題が主題となった。

『家』の橋本家は先祖伝来の薬問屋を経営する地方の名門である。当主の達雄は古い家のやり方に不満で、上京して事業を始めたが、やはり失敗して郷里に戻って家業を継いだ。一方、小泉家は『家』の始まる明治三十一年の時点ですでに没落し、東京に引き移っていた。家長の実は事業を起こそうとしたが、不得要領で失敗を重ね、家は破産した。小泉家の栄光の昔を思い出の形をかりて父忠寛は一村の父、大地主と表された。小泉実の姉お種が達雄に嫁いているため、小泉家と橋本家は姻戚関係にある。

小泉家の末子である三吉は姉の嫁ぎ先で一夏を過ごして、小さくなった小泉の家に帰った。三吉は「平素ですら男の奉公人だけでも、大番頭から小僧まで入れて、都合六人のものが口を預けて居る」(『家』上ノ一)、とまだ繁栄を見せた橋本の家から窮屈になった町中の住まいに帰ってきた。家の中に映ったのは病気でぶらぶらしている兄宗蔵、片隅に寝かしてある乳呑児、縁側で遊んでいる姪のお俊、勝手に出たり入ったりする嫂と下女であった。

家の退廃を身に染みて感じた三吉は、「小泉の家から離れようとした。別に彼は彼だけの新しい粗末な家を作らう」(『家』上ノ三)と思った。旧家に映った光景と違い、質素でよく働く家を作ろうとした。三吉は定まった収入ができる学校の教師になって、田舎で新婚生活を始めた。妻のお雪も贅沢な風俗を改め、壮健な身体を持って夫を助けて働けるだけ働こうと思った。働くことによって自立のできる新しい家はスタートした。

三吉は小泉の家から離れて、彼の粗末な家を作った。妻のお雪は三吉に連れられて田舎臭い住まいに着いた。粗末な食卓、煤けた壁と粗末な道具であるが、外へ出てみると、新鮮な空気はお雪を生き返らせた。こうして新婚の生涯を始めた。三吉も学校から帰るとすぐ鋤を手にして、畠へ出て鉄道草という雑草を抜き取る働きを始めた。

労働者の喜びは新婚夫婦の生活を彩った。こうして三吉夫婦の新しい家の形が成っていく。しかしながら、結婚三年目の三吉は否応なく金銭の泥沼に巻き込まれてしまった。

『家』上巻の第七章に、送金を願う一通の手紙が貧乏教師の三吉に届いた。差出人は東京にいる兄の實である。「直に金を送れとしてある。しかも田舎教師の三吉としてはすくなく高である。前觸も何もなく突然斯ういふものを手にし」(『家』上ノ七)で、三吉は驚いた。

三吉にとっては無理な送金であるが、断りかねた三吉はお雪の持参金で、一応賄った。それにもかかわらず、金を受取った実の方からは家の事情を一つも知らせないまま、また送金を請求してきた。

復た實は電報を打って寄した。左様々々は三吉も届かないと思つた。しかし、弟として、出来得るかぎりの力は盡さなければ成らないやうな気がした。せめて金額でない迄も、送金しようと思つた。その為に、三吉は三月ばかり掛つて漸く書き終つた草稿を賣ることにした。(『家』上ノ七)

辛酸をなめて出獄してきた実は、相変わらず三吉に金銭の融通を求めた。しかも勝手に三吉に金をつくるように決めていた。

復た兄は金策を命じに來た。

『實はNさんのところから、四十圓ばかり借りた。いづれ三吉の方で返しますから、と言つて、時に借りて來た。これは是非お前に造つて貰はにや成らん。』

當惑顔な弟が何か言はうとしたのを實は遮つた。彼は細く書いた物を取り出した。これだけの家具を四十圓で引取ると思つて呉れ、と言出した。それには、箆筥、膳、敷物、巻煙草入、其他徳利、盃洗などとしてあつた。

『頼む。』

と兄は無理にも承諾させて、そこそこに弟の家を出た。(『家』下ノ三)

実からの借金の話しに対する三吉の対応を見れば、自分だけの粗末な家をつくろうとした三吉の新しい家は、結婚三年目にして金銭の関係から旧家に巻き込まれてしまった。家長の実は旧家の権威のもとで弟の三吉に金銭の融通を命じた。三吉は妻の持参金と、完成したばかりの草稿の原稿料でまかなった。急用の時に備えるという百円のお雪の持参金に三吉は手を着けた。

三吉は自分一人の力で、自分の原稿料と妻の持参金まで投げ込んでも旧家の没落を挽回しようとした。そもそも『家』上巻の第六章に『兄貴の家を見たら、俺もウカウカしては居られなく成つて来た。』と言った三吉は、旧家の名誉を一身に引き受けた。貸借関係と贈与関係が曖昧なまま、旧家への没落を惜しむ感情にひたすら走っていった。

何故小泉の家が今日のやうに貧乏に成つたらうとか、何故娘達がそれを思はないだらうとか、何故舊い足袋を穿いて居ても流行を競ふやうな量見に成るだらうとか、(『家』下ノ三)

こうした感情を持った三吉に親戚の無心が次々と来た。

他事でも無かつた。すこし金を用立てゝ呉れろといふので有つた。

是迄もよく叔父のところへ、五圓貸せ、十圓貸せ、と言つて来て、樺太行の旅費まで心配させたものであつた。(『家』下ノ一)

金額の少ない五円、十円をよく無心した甥の正太が、今度は二千元という大きな金の相談を持ってきた。

金の話であつた。郷里に居る正太の知人で、叔父の請判があらば、貸出しさうなものが有る。商法の資本として、二千圓ばかり借りて来たい。迷惑は掛けないから、判だけ捺して呉れ。(『家』下ノ六)

正太から判だけ捺してくれと頼まれた三吉の当惑に、森彦は黙って見ているわけいかないと、正太を諭すように「實も達雄も皆な同じ行き方で親類を倒して居る」(『家』下ノ六)と言い出した。そして自分は志ばかり大きいものであつても、信用を失わないように心掛けてしていると意気揚々であつた。こうして、正太を諭す森彦もついに弟の三吉にお金の融通を頼む時が来た。

人は誰しも窮する時がある、それを思つて一肌脱いで呉れ、親類に迷惑を掛けるといふは元より素志に背くが、二百圓ばかり欲しい、是非頼む、(『家』下ノ八)

『家』の小泉家と橋本家は、家の内部にある輻輳した金銭関係によって

崩壊していった。三吉の新しい家の建設は、『家』最終章の「屋外はまだ暗かった」と描かれたように、余韻を漂わせたが、新しい家の建設は大きな挫折を受けなければならなかった一方、旧家の名誉を一身に引き受けようとした三吉の自己の確立に矛盾が生じられていた。

4 『夜明け前』の半蔵

『夜明け前』の主人公青山半蔵は、東山道木曾街道の一宿駅馬籠の本陣、庄屋、問屋を兼ねる旧家青山家十七代の当主である。父吉左衛門から家督を譲られたのは文久二年（一八六二）で、嘉永六年（一八五三）の黒船来航からほぼ十年を経ていて、明治改元（一八六八）に先立つ前約六年であった。半蔵が遭遇した時代は、彼の代々の先祖と歴史的な事情を相異した時代であった。彼の代になってまもなく、年号は明治と改元され、江戸は東京となった。藩籍が奉還され、旧い伝馬制度も崩れた。半蔵はついに父祖伝来の家業を失った。

明治二年の二月を迎える頃、木曾福島の間所はすでに崩れて行った。福島代官所の廃止もそのあとに続いた。理想に従えば、改革は当然であるが、改革に従えば、半蔵は三百年の宿村の世話という父祖伝来の名誉職のような古い家業を捨てなければならない。到頭半蔵は本陣附属の問屋を廃し、会所を閉じることにした。『夜明け前』下巻第六章第五節に、「半蔵は自分の注文通りに、新設の傳馬所を九郎兵衛方に譲り、全く新規なものゝ支度をそこに始めさせることにした」と、家計を立てるような伝馬所の事業を九郎兵衛に譲り、自ら勞多くして、利の少ない戸長の職に身をゆだねた。こうした時期に、半蔵は飢饉の救済活動をし、尾張藩より表彰されるが、家計を困難にさせる一方である。

戸長の身となった半蔵はいよいよ収入の入らない事業に没頭する。村の子供たちの教育のために尽力したことはその一つであり、もう一つは村民の死活問題にかかわる、山林事件に奔走したことである。半蔵が教育に尽力する姿をみよう。

學事掛としても、村の萬福寺の横手に假校舎の普請の落成するまで、さしあたり寺内を假教場にあて、從來寺子屋を開いてゐた松雲和尚を相手にして、出来るだけ村の子供の世話もしなければならないからであつた。子弟の教育は年來の彼のこゝろざしであつたが、まだ設備萬端整は

なかった。(『夜明け前』二ノ八ノ一)

今は半蔵も村方一同の希望を容れ、自ら進んで教師の職に就き、萬福寺を假教場に宛てた學校の名も自ら「敬義學校」といふのを選んで、毎日子供達を教へに行く村夫子の身に甘んじてゐる。彼も教へて倦むことを知らないやうな人だ。(『夜明け前』二ノ九ノ三)

村の寺子屋は大都市と違い、師匠の収入源はきわめて少なかった。利の少ない事業に、半蔵は情熱的であつた。村役人である庄屋が改められ、いまは戸長の身である半蔵は、村民のために、山林事件の奔走にふんばつた。山林は木曾の住民にとって最大の生活資源である。檜木、榎、明檜、高野榎、槇は木曾五木と称され、徳川時代から厳しい保護が加えられてきた。その上に、巢山、留山、明山の區別があつて、巢山と留山は絶対に村民の立ち入りをゆるさず、明山だけが自由であつた。明治維新はこうした不合理な山林支配を自由化しなければならなかつたが、明治五年に新しい官吏制度がしかれると同時に、山林地帯全体を官有林とみなし、自由な伐採は許さないこととなつた。そうなると、木曾の住民にとって山林の利用は徳川時代より一層悪くなつてしまう。

半蔵は三十三ヶ村の総代として奔走し、嘆願書を提出したが、その結果は徒勞であつた。それだけではすまされずに、彼は福島を支庁に呼び出されて、「今日限り、戸長免職と心得よ」(『夜明け前』二ノ八ノ五)という一通の書付を渡される。「御一新がこんなことでいゝのか」(『夜明け前』二ノ八ノ五)と彼は嘆いた。この事件によって彼の受けた打撃は大きかつたが、そもそも半蔵自身の出費がないと、嘆願は無理であつた。奔走のための王滝行きは、半蔵自分の賄いで間に合わせた旅に関する描写を次に取り上げる。

戸長の旅費、一日十三錢の定めとは、ちよつと後世から見當もつかない諸物價の懸け離れてゐた時代だ。それも戸敷割でなしに、今度は彼が自分賄ひの小さな旅だつた。(『夜明け前』二ノ八ノ三)

山林事件は「戸長免職」という思いがけない結果となつた。こうして青山家の古い背景が消えて行く際に、娘お糸の結婚が近づいてきた。「さう言へば、お民、半蔵が吾家の地所や竹藪を伏見屋へ譲つたげなが、お前もお聞きかい。」(『夜明け前』二ノ九ノ二)と描かれたように、半蔵は青山家の不動産を売って、お糸の嫁入りの支度料にした。継母のおまんなは半蔵の苦心を知つていても經濟の才を持たない半蔵に、文句を言わねばならなかつ

た。次の描写から窺える。

今度だけはお前、仕方がないとしても、旦那（吉左衛門）が半蔵に遺して置いて行つた先祖代々からの山や田地はまだ相應にある筈だ。あれが舵の取りやう一つで、この家がやれないことはないとわたしは思ふよ。無器用に生まれついて來たのは性分で仕方がないとしても、もうすこし半蔵には經濟の才を呉れたいツて、旦那が達者である時分にはよくそのお話しさ。（『夜明け前』二ノ九ノ二）

お糸の結婚に近づき、家中の準備に忙殺されるが、お糸は笑いを失っていった。母お民の心づかいからできた新調の晴れ着もお糸を楽しませなかった。彼女は旧庄屋風情の娘にふさわしい情に過去をしのぶ。「父半蔵の失意を悲しみながら、彼女は家の没落を意識させられた。家の女衆の中で、最も深く瓦解の淵をのぞいてみたのはお糸である。家の没落で、かつての縁談は破約となったことは彼女にとって堪えられない辛い経験であった。祖母おまんの強い意見で、おまんの生家方の稲葉家と新しい縁談が成立したが、彼女は死をもって自分の運命と争おう」（『夜明け前』二ノ九ノ七）とした。自害を企てたお糸は発見が早いことで、一命を取りとめたが、半蔵が受けた打撃は大きかった。娘のこのことを機会に、過去を清算し、新しい生涯に入りたいと半蔵は考えた。

明治は七年となつて、半蔵は東京の旧知、今は文部大丞に任じている田中不二麿を訪れる旅に立った。田中不二麿の斡旋で、半蔵は教部省の雇いとして一時奉職することとなった。しかし、目の前に展開された新政に対し、半蔵は失望した。国学者の理想である祭政一致は、明治維新によって実現のきざしが見出されたが、それが早くも衰退していった。最初、政治は太政官、精神面はすなわち神道という宗教は神祇官が担当した。明治三年の正月に、大教宣布という宗教と政治が一致してやる詔勅が出たばかりなのに、明治四年の八月に、神祇官が神祇省に格下げされて、明治五年になると、神祇省が廃止され、教部省に含まれることになった。そして同年の十月に、教部省は文部省に合併されてしまった。わずか二年の間に、神祇官は文部省の一部局に過ぎないこととなった。半蔵は次のように自問自答した。

「これでも復古と言へるのか。」

その彼の眼前に展けつゝあつたものは、歸り來る古代でもなくて、實に思ひがけない近つ代であつた。（『夜明け前』二ノ十ノ四）

やるせない没落感を抱いた半蔵は教部省の墮落を憤り、同僚を打って教部省を去った後、再び田中不二麿の推薦で、飛騨一宮の水無神社の宮司に就任することを承諾した。赴任前に、明治天皇の行幸を拝しようとして神田橋へ行き、感動のあまりに、自作の歌「蟹の穴ふせぎとめずは高堤やがてくゆべき時なからめや」をしたためた扇子を御馬車に投じた。不敬漢と思われる、その場で巡査に捕らわれた。入檻された半蔵は医者に精神状態を鑑定するように注意され、やがて謹慎の身で帰宅が許されたが、裁判所からの沙汰を待つ半蔵はとうとう東京で年を越した。結局、五十日の懲役にはいわずにすんだが、贖罪の金額が科せられた。半蔵の献扇事件は大事に至らずに終わったが、東京に長く滞在する費用は増える一方であった。

平兵衛に迎えられてやっと帰郷の路にのぼった半蔵は、長く自分の家にとどまることができずに、三日ばかりで馬籠を立て、任地へ出発した。そして継母おまんの意志で、家督を息子の宗太に譲った。

継母に言われるように、経済の才を持たない半蔵はこの度東京滞在に費やした旅費を返済するのに、青山家の田地を売る以外に路はなかった。

四年間飛騨一宮の水無神社の神官として斎きの道につかえた半蔵は神道を最尊の道と考えたが、その主張は必ずしも土地の人に受け入れられるとは限らなかった。飛騨から帰郷してきた半蔵は、馬籠にて子弟の教育に余生を送ろうと決意し、明治十四年、半蔵五十一の年に、三男・四男を東京に遊学させようと考えた。肝心の費用は先祖から譲られた財産を処分することにした。家督を相続した宗太の同意で、半蔵の希望はかなった。

二人の子供は東京に遊学させる、木曾谷でも最も古い家族の一つに数へらるゝところから「本陣の子供」と言つて自然と村の人の敬ふにつけても兎角人目にあまることが多い、二人とも親の膝下に置いては將來ろくなことがない、今のうちに先代吉左衛門が残した田畑や本陣林のうちを割いて二人の教育費にあてる、(『夜明け前』二ノ十三ノ六)

ここまで述べてきたように、半蔵は理想家肌で、金銀を営む利益心をも一つも有しない純朴な人間であったが、現実問題の厳しさに、彼はとうてい耐えられなかった。半蔵は時代の変遷を乗り越えるために、青山家の財産を処分するように傾いていった。

例の飛騨行以来、半蔵は家政一切を宗太に任せ、平素委しいことも知らない隠居の身であったが、それから十年の後になると、青山の家に出た大借は元利およそ三千六百圓ばかりの惣高に上った。就い

ては、所有の耕地、宅地、山林、家財の大部分を賣り拂つてそれぞれ辨償すると言ひ出したのも宗太であつた。(『夜明け前』二ノ十四ノ二)

長男の宗太がいよいよ青山の家を整理しなければならない羽目になった。明治十七年、大借のため青山家はあらゆるものを売り払わねばならぬところまで追いこまれてしまった。これは子が父を別居させ、誓約書を出さしめることとなった。半蔵は禁治産者あつかいにされ、いっさいの経済的行為より疎外され、酒の制限まで加えられた。馬籠旧本陣をこんな状態に導いたのは年來国事その他公共の事業にのみ奔走して家を顧みない半蔵であるとの非難さえ、家の内にも外にも起つてきた。これには半蔵は驚いてしまったが、その非難にどうしても納得ができなかった。

失意と憂悶のうちに半蔵は次第に狂氣に導かれていった。「暗い、暗い」(『夜明け前』二ノ十四ノ三)と隠居した半蔵はよくそんなことをくちばしつた。「彼の中に住む二人の人は入れ替わり立ち替わり動いて出て来るやうになつた」(『夜明け前』終の章)半蔵はつい「俺には敵がある」(『夜明け前』二ノ十四ノ三)と仮想の敵をつくっていった。「さあ、攻めるなら攻めて来い」(『夜明け前』二ノ十四ノ三)と震えた半蔵は、「俺はこれから行つて寺を焼き捨てる。あんな寺などは無用の物だ」(『夜明け前』二ノ十四ノ四)と、彼の先祖が立てた万福寺の本堂へ放火しようとした。幸い大きい災害にはいたらなかったが、謹慎のため、彼は自分の子にしばられて、座敷牢に引き立てられた。その座敷牢の中で、五十六歳の生命を終えた。墓地には一人去り、二人去りして、

「さあ、もう一息だ」

その聲が墓掘りの男達の間に起る。續いて「フム、ヨウ」の掛け聲も起る。半蔵を葬るためには、寢棺を横たへるだけのかなりの廣さ深さも要るとあつて、掘り起される土はそのあたりに山と積まれる。強い匂ひを放つ土中をめぐめて佐吉等が鍬を打ち込む度に、その鍬の響きが重く勝重のはらわたに徹へた。一つの音の後には、また他の音が續いた。

(『夜明け前』終の章)

と、彼の愛弟子勝重のみがそこに残つた。

勝重にしてみれば、師匠さん半蔵はあたかもその時代と戦つて、そしてその時代に定められた運命に敗れた切ない人間のようなのであるが、半蔵の悲劇的な一生は、一步一步金銭に迫られていった現実的な一側面を見逃すことができない。

5 おわりに

藤村が『海へ』で述べているように、自分の半生を振り返って、自分の歩いてきた細い道を辿ってみて、触れてみたいものを言ってみれば、それが「近代の精神」であった。「人として眼を覚ましたい」、それが藤村の半生の学問の究極の目的である。浪漫主義詩人として出発し、自然主義の大家として創作を続けたその根本な精神は、人生の真実への探求であった。本論で取り上げた『春』の主人公岸本、『家』の主人公三吉及び『夜明け前』の主人公半蔵の人物像の分析でわかるように、金銭問題は近代を追求した人間にとってさけては通ることのできない問題である。藤村は創作に際し、金銭という現実問題を捨象した手法を取ったが、作品を分析すれば、金銭問題は伏線として読み取ることができる。金銭問題を通して、藤村が作り上げた近代に目覚めた人間像が一層鮮明な性格をみせてくれたのである。

使用テキスト 『藤村全集』（全18巻 別巻1）筑摩書房1966年～1968年

参考文献（年代順）

- 1 林寄雯 2002 「『春』における明治二十六年の関西旅行の路用について」『解釈』七・八月号 P4~9
- 2 林寄雯 2001 「『夜明け前』における半蔵の悲劇—金銭問題を中心に—」『台湾日本語文学報』16号 P207~227
- 3 林寄雯 2001 「島崎藤村の『家』における金銭問題」『解釈』七・八月号 P13~19
- 4 所三男 1971 「青山半蔵と木曾の山林事件」『徳川林政史研究所研究紀要』
- 5 成瀬正勝 1971 「『星野天知自叙伝』と『黙歩七十年』—主として『文学界』時代について—」『成蹊国文』第四号
- 6 田中宇一郎 1968 「『夜明け前』と私—藤村十年の労作のかげに—」『政界往来』第三十四卷第十一号
- 7 東京庚寅新誌社編 明治二十七年十一月 『汽車汽船 旅行案内』 東京庚寅新誌社